
「つり人」が 見つめる 淡水魚の これまでと これから

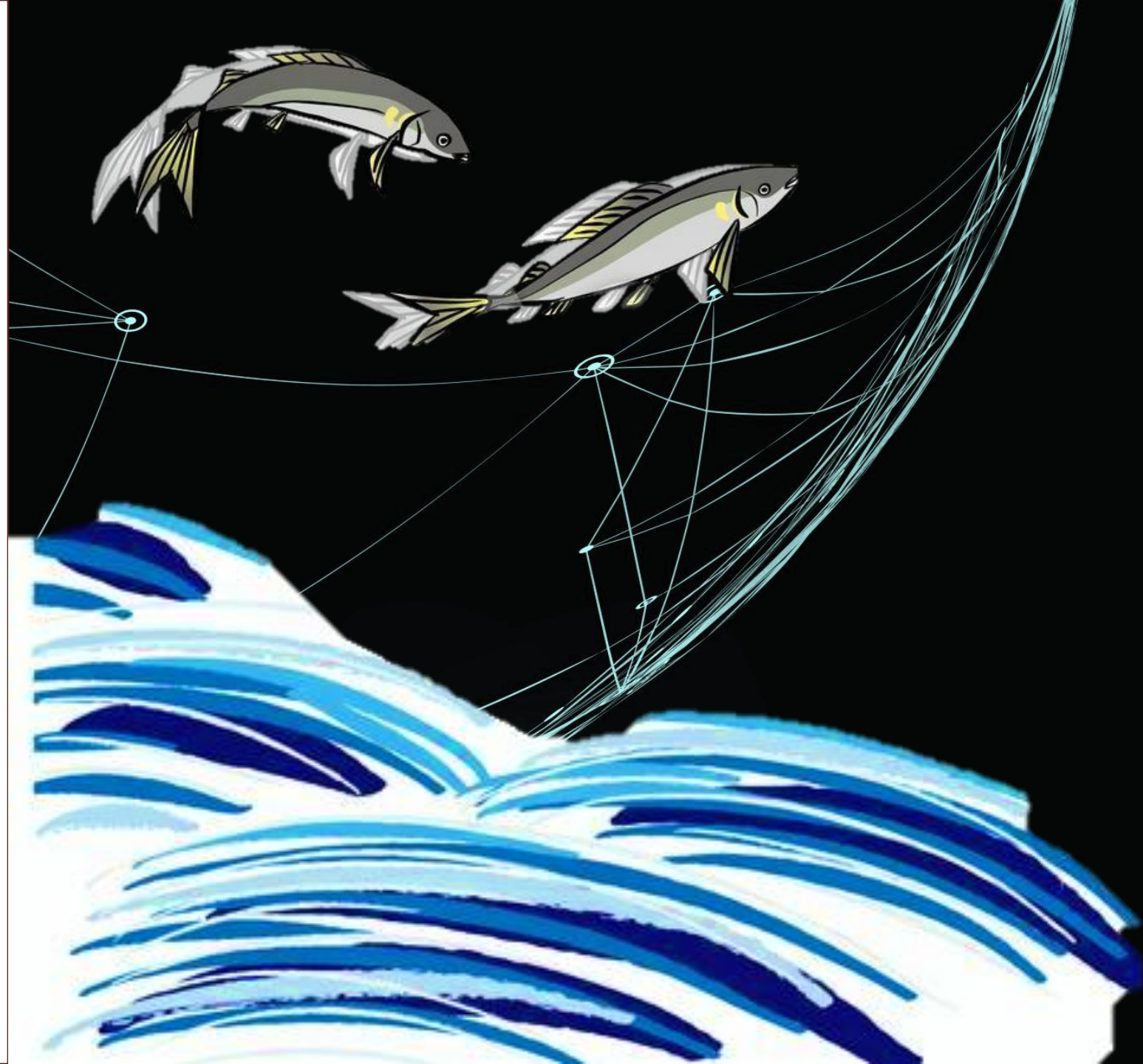


杉野弘明

山口大学

国際総合科学部

講師



突然ですが、、、

■ぜひアンケートにお答えください：

問1：海釣りの楽しさ

問2：川釣りの楽しさ

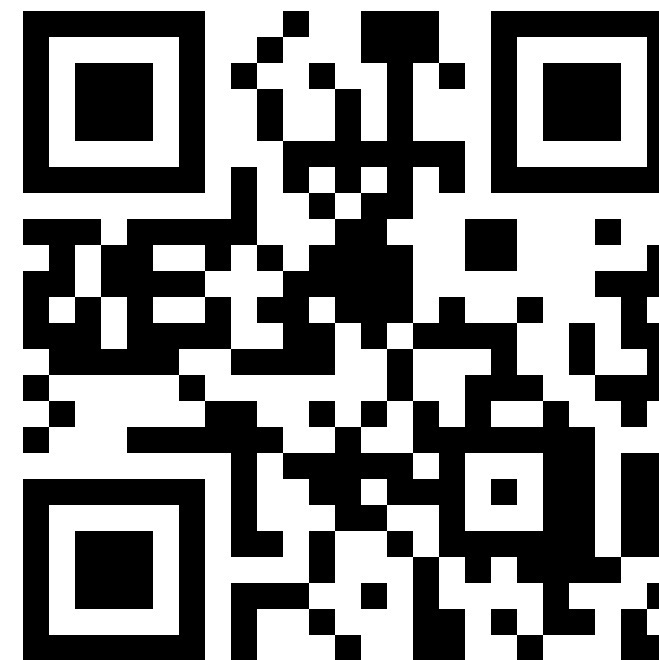
の2点を教えて頂ければ幸いです。

お手持ちの携帯で右のQRコード

を読み取って頂き、アンケートに

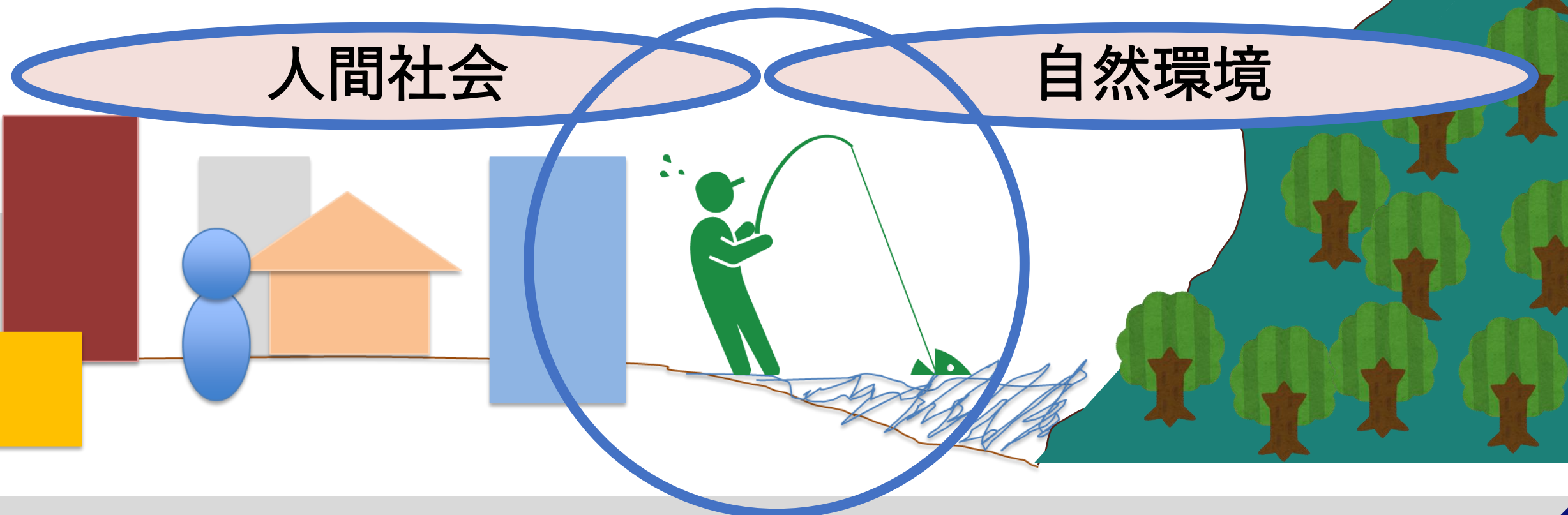
簡単に、かつご自身のお考えで

結構ですのでお答えください。



<http://bit.ly/3HlesxP>

釣りは資源の社会的センサー



話題提供：お品書き

淡水魚を見つめるための視点

■ セクション1：公的な調査からの視点

■ セクション2：計量書誌学からの視点

■ セクション3：「つり人」からの視点



話題提供：お品書き

淡水魚を見つめるための視点

■セクション1：公的な調査からの視点



公的な調査

淡水魚に関する公的な調査
(一般の人にもアクセスできる情報)

国土交通省
河川水辺国勢調査

環境省 (自然局)
自然環境基礎調査

淡水魚に関する公的な調査
(一般の人にもアクセスできる情報)

国土交通省

河川水辺国勢調査

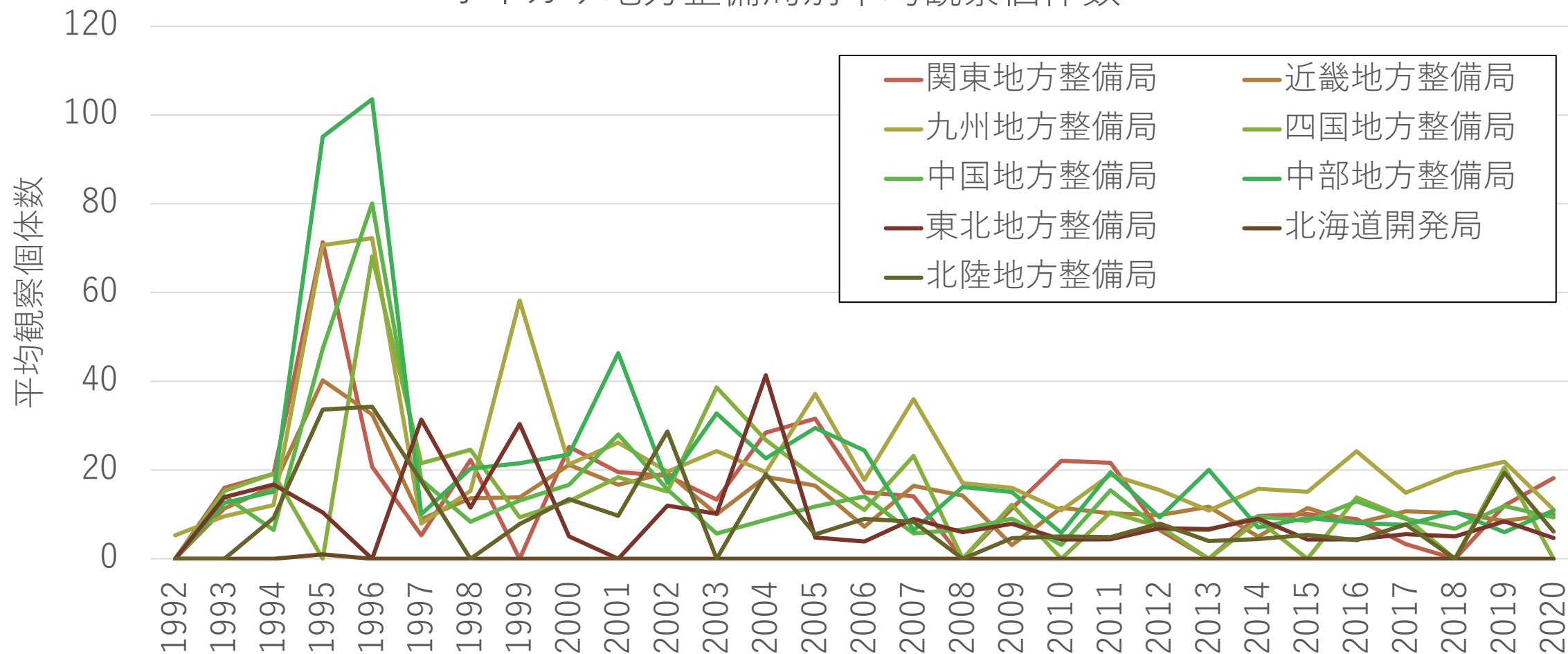
環境省 (自然局)

自然環境基礎調査

- 全国109個の1級・2級河川のデータ
- 平成2年(1990年)～
- 「河川環境データベース」において各川レベルでデータが提供
- データは全国を10地方に分けて保管 (1990年～1992年くらいから)
(<http://www.nilim.go.jp/lab/fbg/ksnkankyo/index.html>)

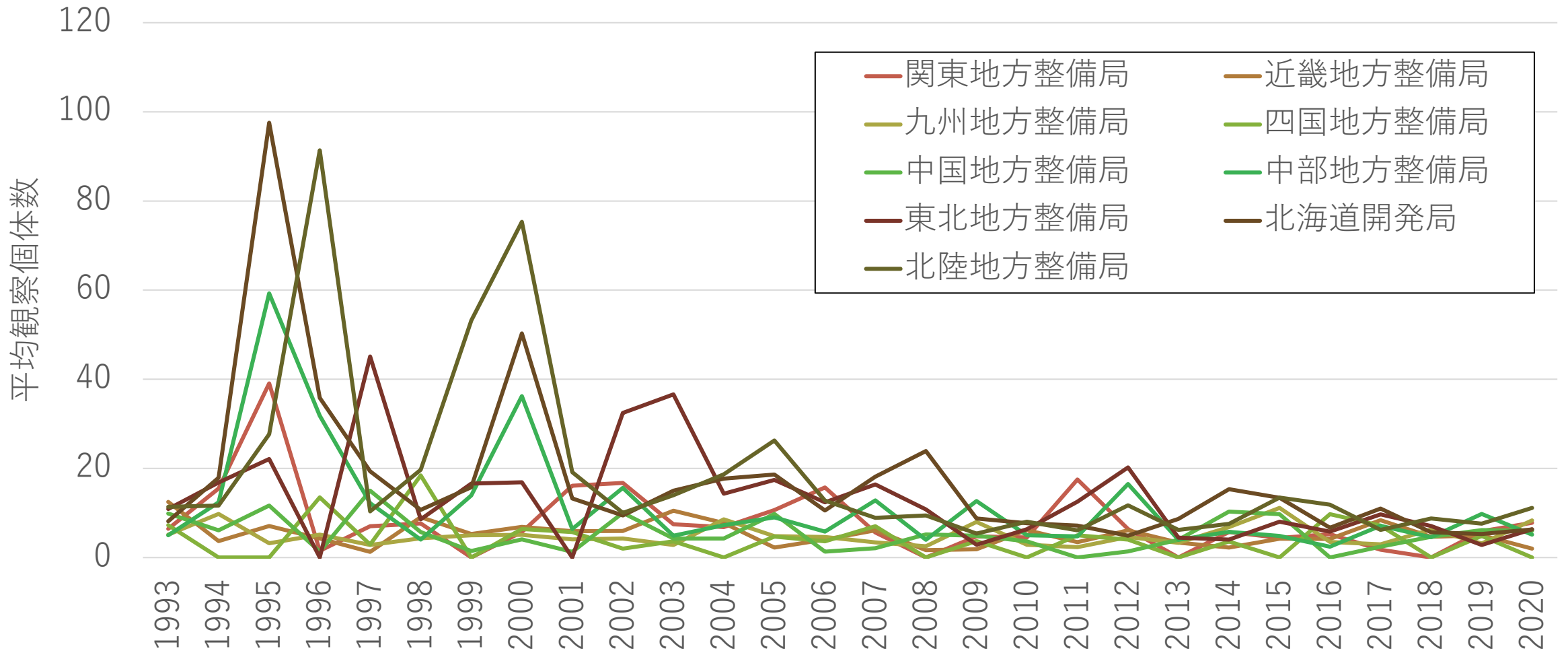
オイカワの全国平均

オイカワ地方整備局別平均観察個体数

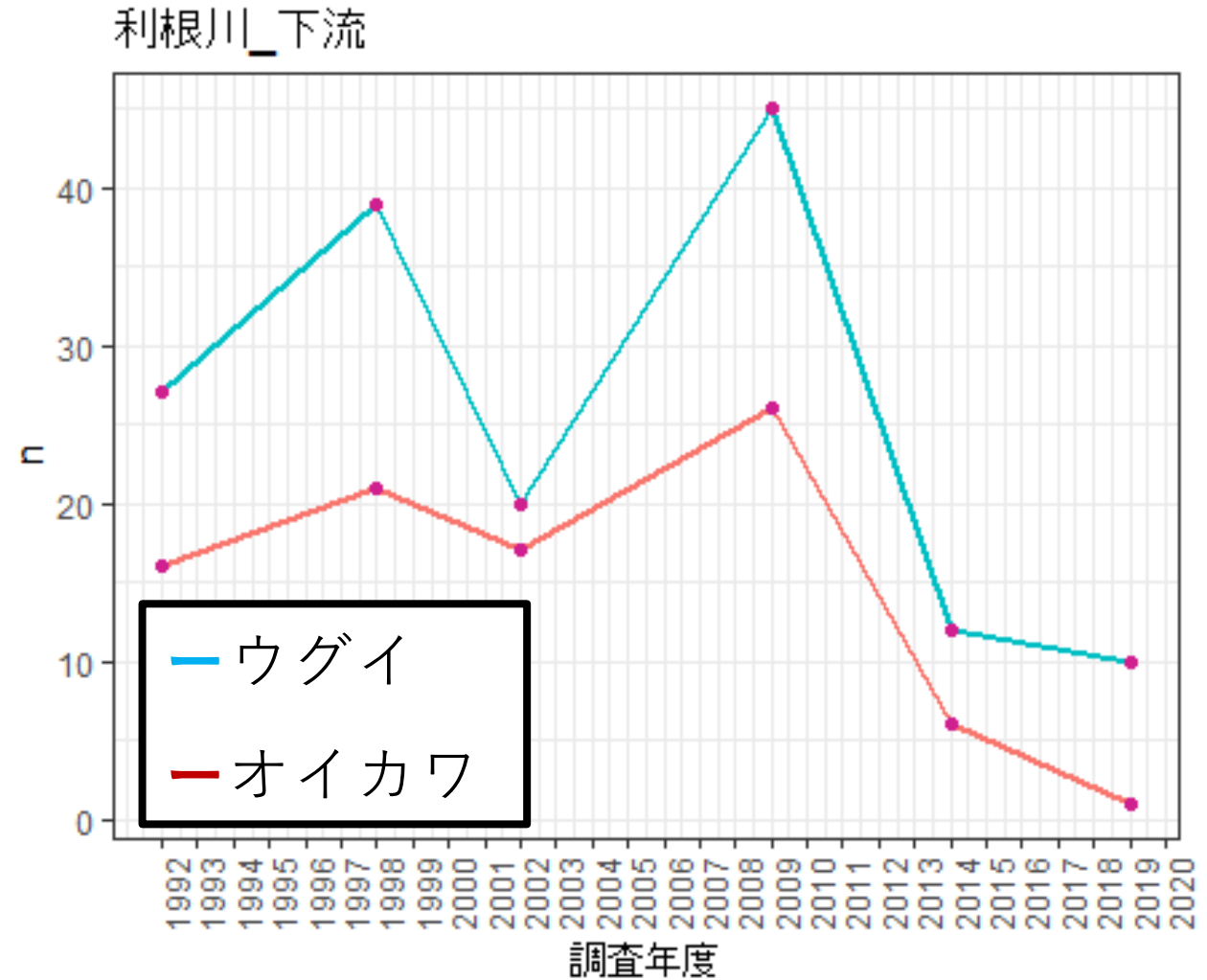
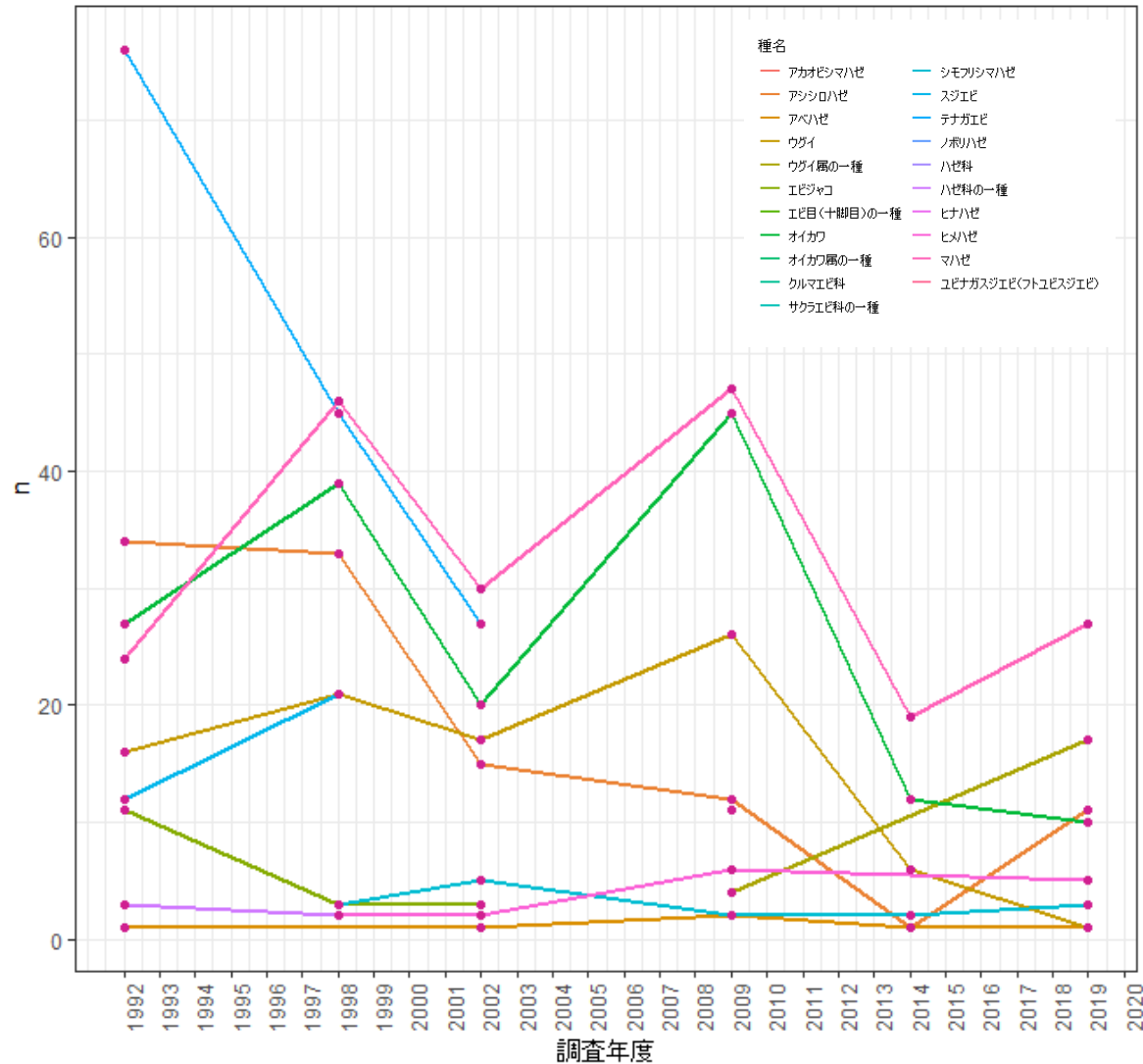


ウグイの全国平均

ウグイ地方整備局別平均観察個体数



利根川・下流(千葉県)では



公的な調査からの視点

1. 全国平均的にはオイカワやウグイなど、生物学的に重要な種は減少しているようにデータでは見える。ただし、調査時の採取法やかけられた労力などが違っていることもあり、細かくは見ることができない。

2. 河川によって資源データの動き方は違う。川の周辺環境の違いが反映されているだろう（地理的/時系列的）。

3. 自然資源豊富な日本において、淡水魚の資源を追うためには、国勢調査に加えて、様々な視点から補完して見ていく必要性がある。

話題提供：お品書き

淡水魚を見つめるための視点

■ セクション1：公的な調査からの視点

■ セクション2：計量書誌学からの視点

■ セクション3：「つり人」からの視点



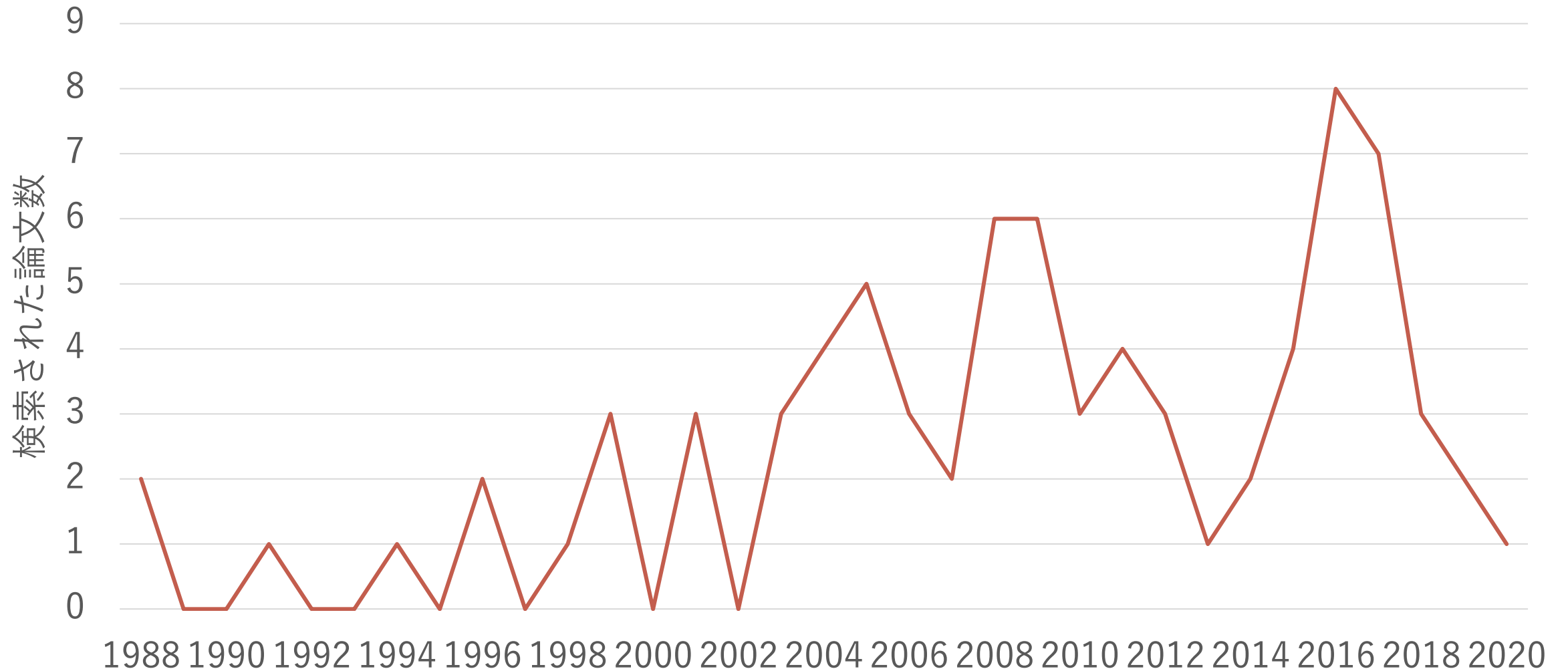
話題提供：お品書き

淡水魚を見つめるための視点

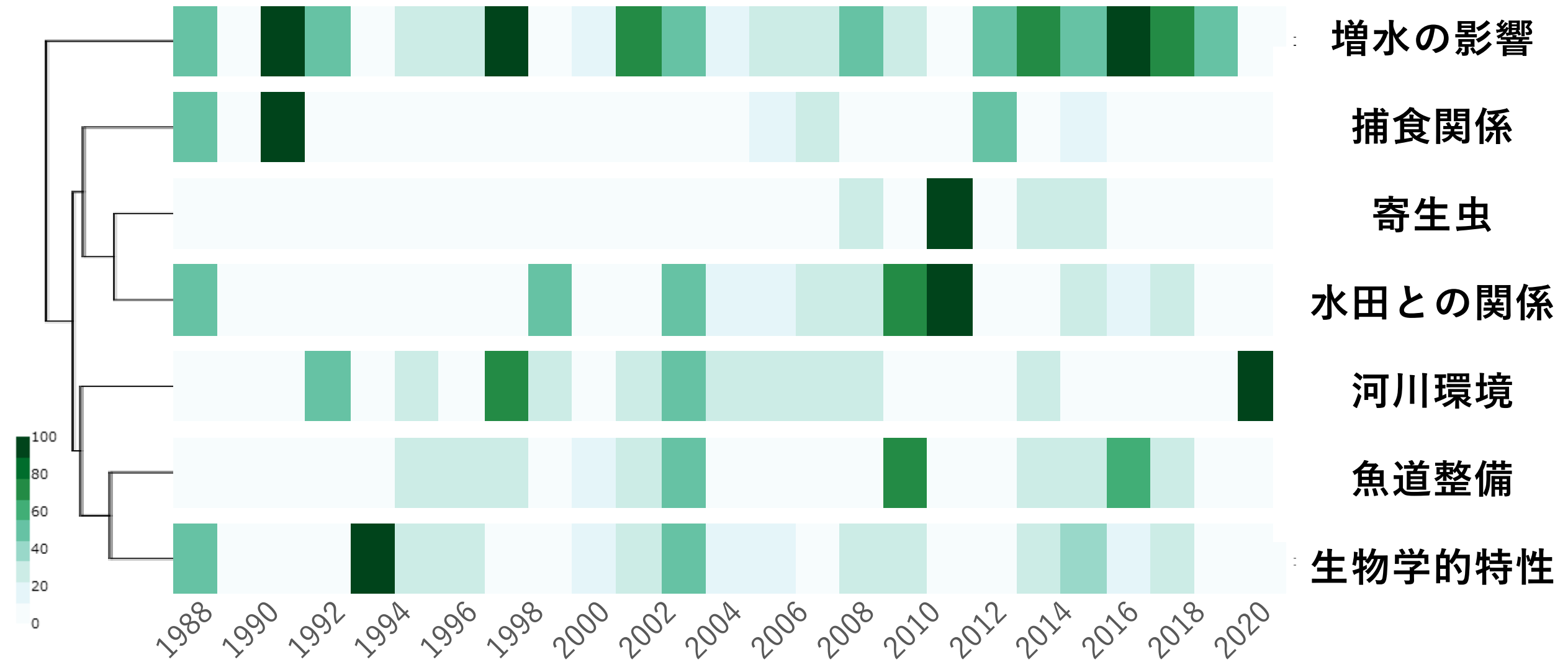
■ セクション 2：計量書誌学からの視点



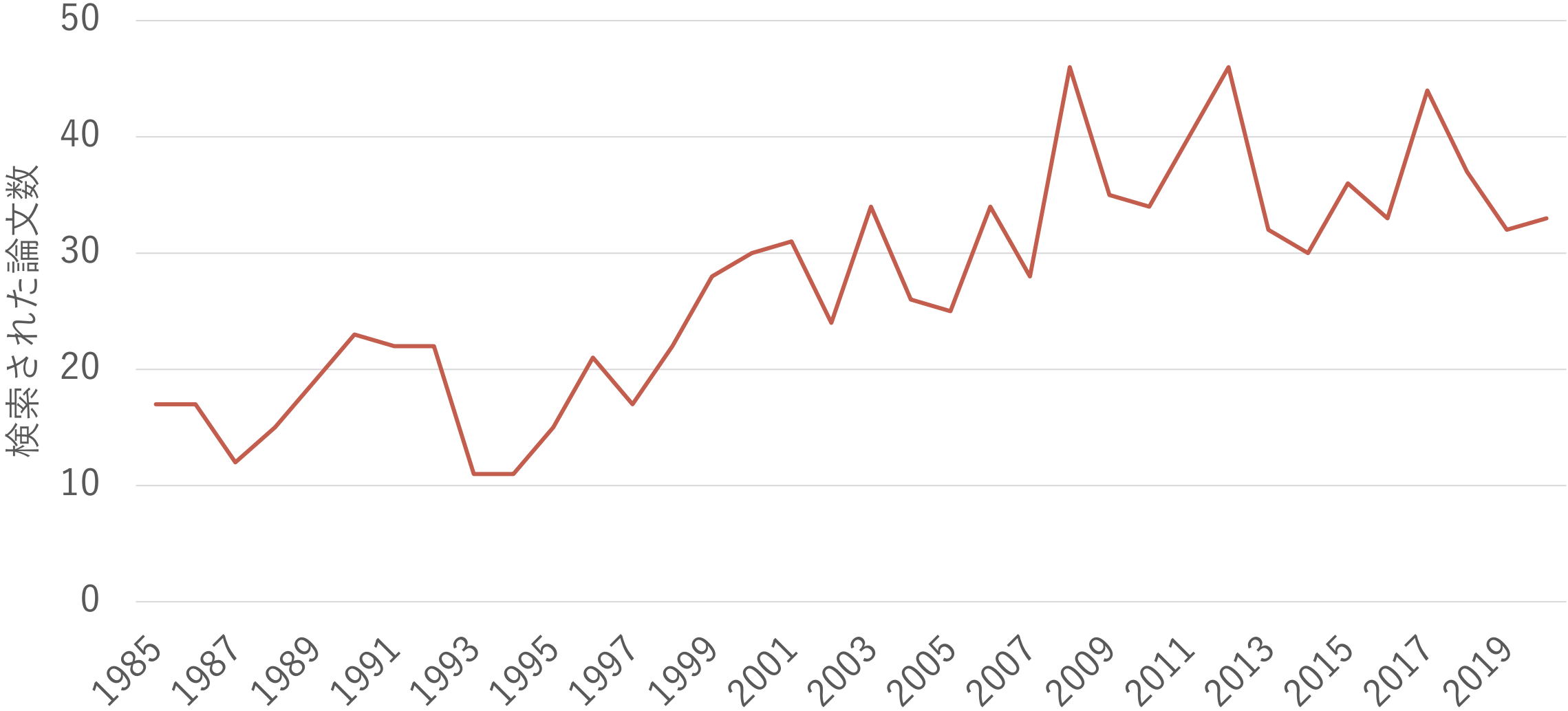
研究論文におけるオイカワ



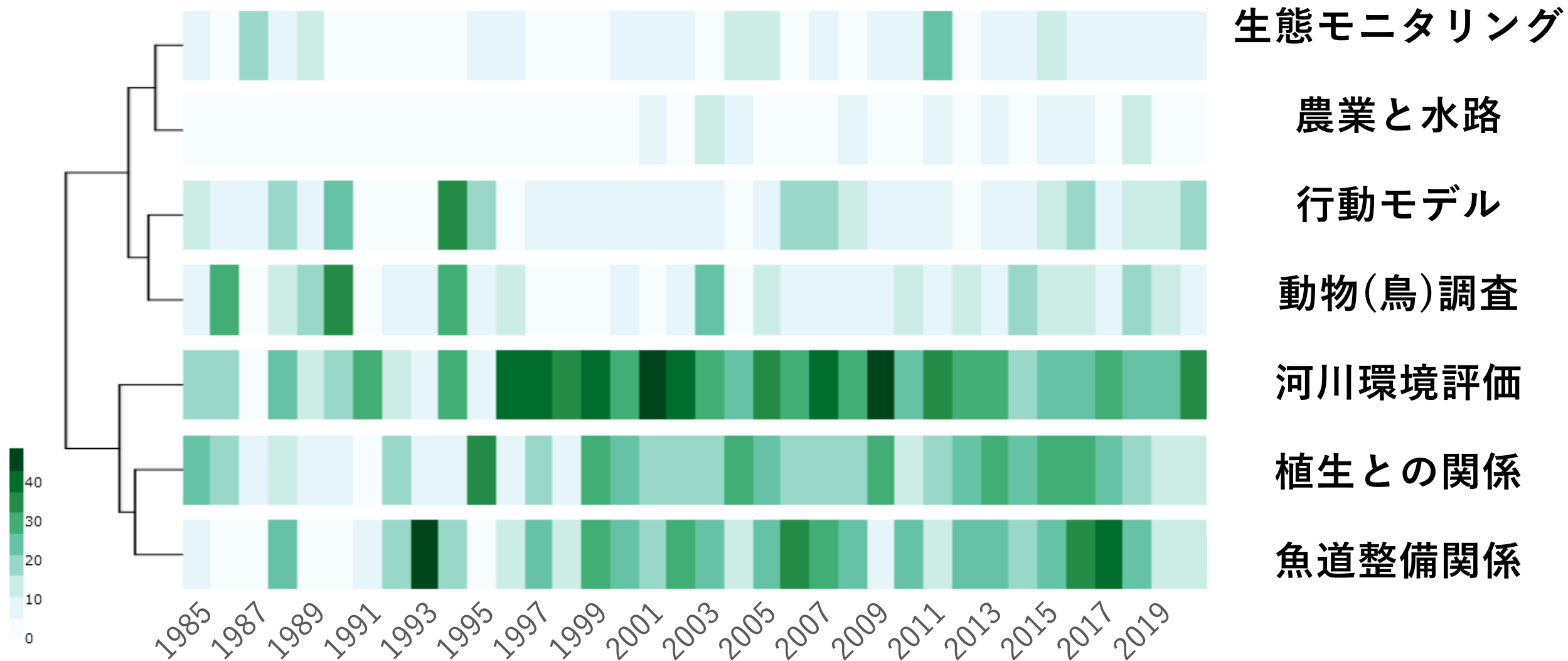
研究論文におけるオイカワ



研究論文におけるウグイ



研究論文におけるウグイ



研究論文からの視点

1. オイカワやウグイなど、生物学的な指標となる魚種として、取り上げる研究は脈々と増えている。

2. 内容はその魚種によって違ってきているが、農業や周辺環境との関係性やその他の魚種との捕食や餌の競争関係などは共通している。

3. 連続的な観測となると、特定の場所*に関するものに限られるため、日本全国に広がる河川環境を見るには限界がある。

*例えば、1994年の神奈川淡水試報30の芦ノ湖におけるカワサギ資源生態調査や芦澤と坪井により報告された山梨県富士川水系におけるカワウの調査に付随して行われた2000年と2008年の餌となる魚資源の捕獲重量調査などで、オイカワの観測個体数の減少が報告されている。

話題提供：お品書き

淡水魚を見つめるための視点

■ セクション1：公的な調査からの視点

■ セクション2：計量書誌学からの視点

■ セクション3：「つり人」からの視点



話題提供：お品書き

淡水魚を見つめるための視点

■セクション3：「つり人」からの視点



「つり人」の内容分析

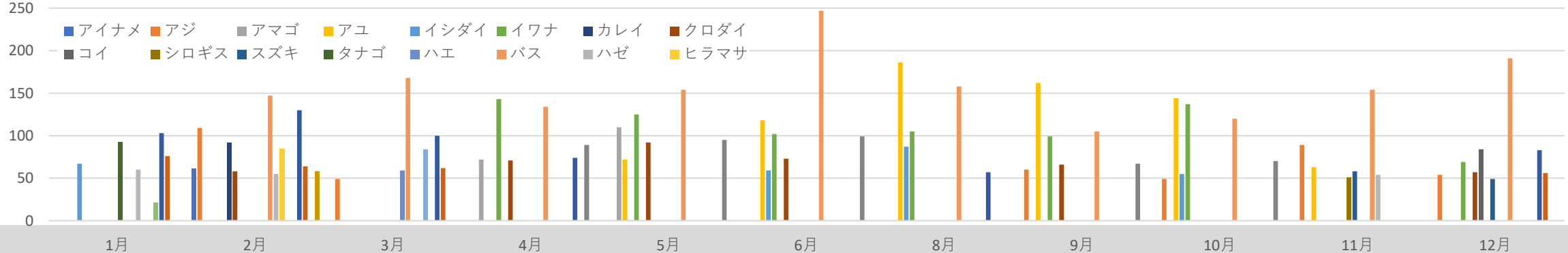
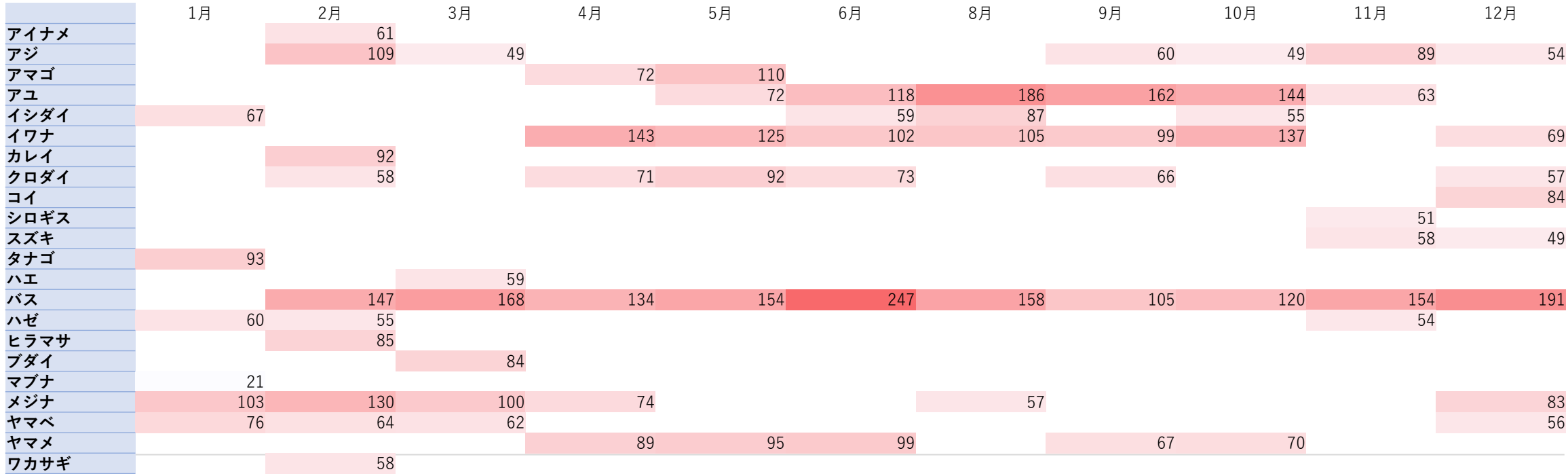


- 釣りに関する情報雑誌として、現在に至るまで愛される
 - 1985年~2009年の現存する雑誌について、つり人社様および日本釣振興会様のご協力のもとデータ化
 - 1冊約30万字~40万字
 - 中に出てくる文字を計量書誌学の技術で分析
- ★例えば、1985年1月号においては、
下記の魚種が多く記述されていた。

ヤマベ、マブナ、イシダイ、メジナ、タナゴ

「つり人」の内容分析

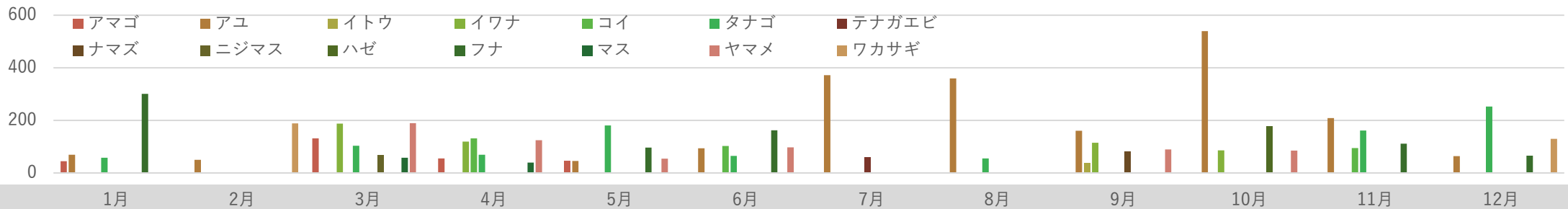
・ 1985年の魚スケジュール



「つり人」の内容分析

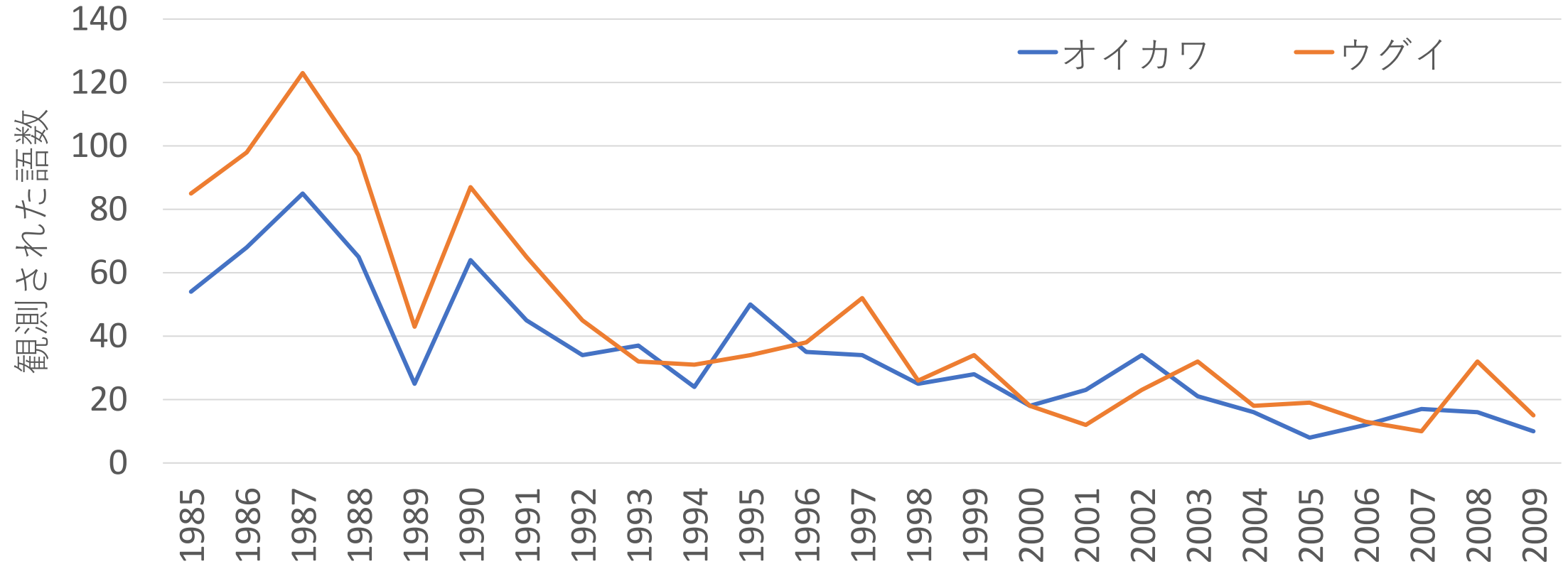
• 2009年の魚スケジュール

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
アマゴ		45	132	56	47							
アユ	70	50			46	94	372	360	161	540	209	64
イトウ									38			
イワナ			188	120					115	86		
コイ				132		103						95
タナゴ	58		104	70	181	65		56			162	253
テナガエビ							58					
ナマズ									80			
ニジマス			67									
ハゼ										178		
フナ	301	0	0	0	97	163	0	0	0	0	112	66
マス			58	40								
ヤマメ			190	125	55	98			90	85		
ワカサギ		189										130



「つり人」の内容分析

- ・ オイカワとウグイの経年変化（表出語数）



「つり人」の内容分析

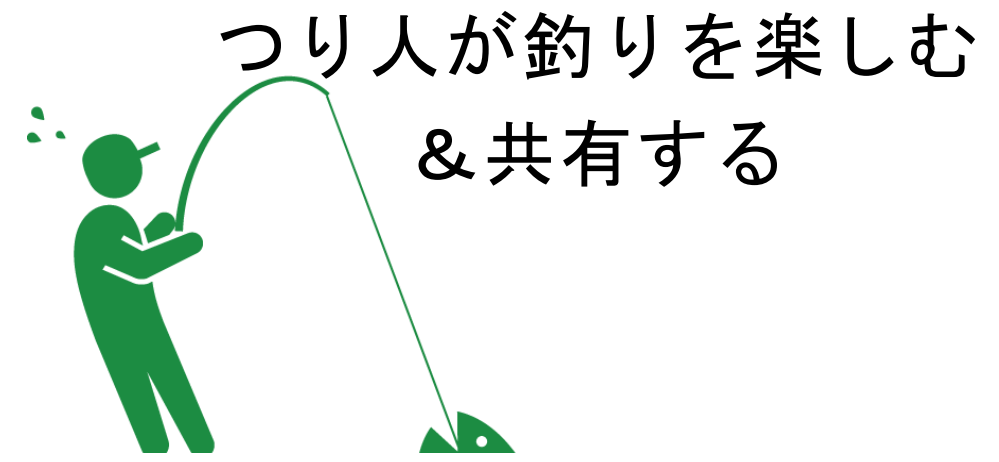
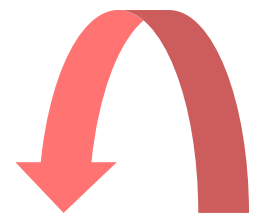
1. 「つり人」内の魚種への言及数の変化は、資源量の増減ではなく、社会文化的なトレンド = 自然の供給と社会の需要の綱引き

2. 現代に迫るにつれて、魚種はトレンドを示す魚（アユ）などに特化しつつも、多様化も見られる。釣りが「釣り人」に見つめられてきた。
★釣りだけでなく、魚食や環境保護についての記事も充実。

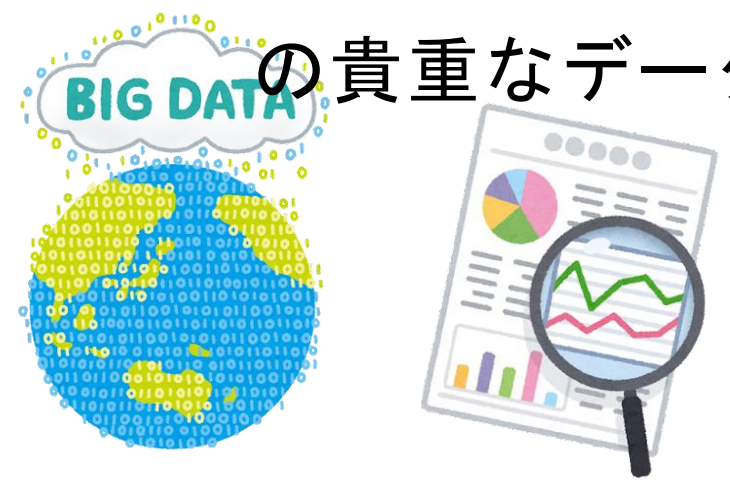
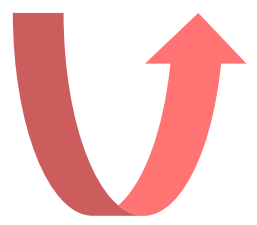
3. 社会の需要の弱まりに対して、釣りを嗜む人達はどう動くのか、今後も歴史ある雑誌や媒体のデータを保管し、観測していくことの重要性

個人もデータを提供できる時代

例：ANGLERS



資源の動向を追うための貴重なデータとなる



<https://anglers.jp/>

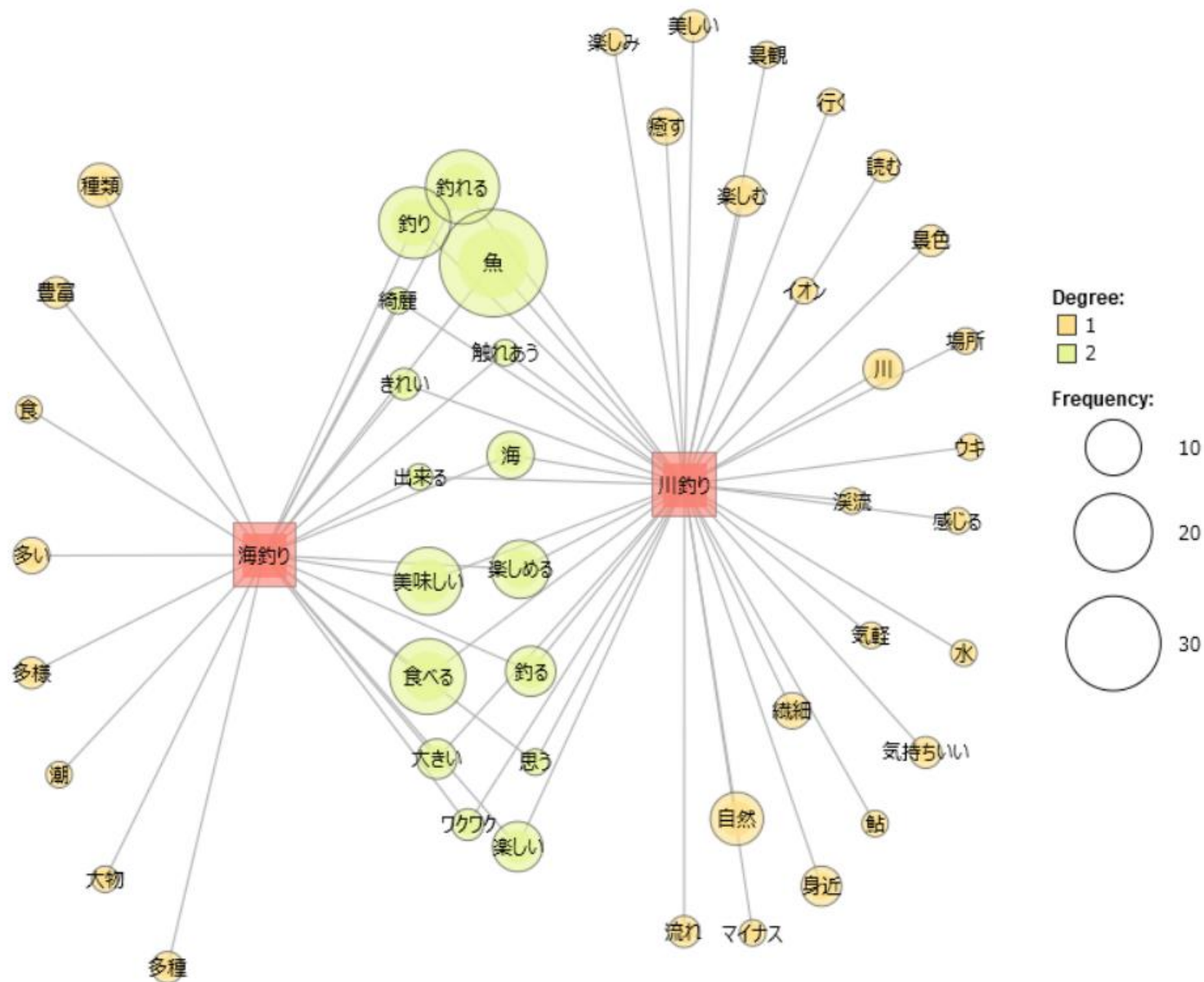
メッセージ

釣りは資源の社会的センサー

人間社会

自然環境

公的(政府) × 社会文化(釣り人社など) × 個人 × 研究者 × . . .
 = 資源の変動に応答的な社会 with 自然と社会の接点としての釣り



左が海釣りに特徴的な単語、真ん中が海釣りと川釣りに共通する単語、右側に川釣りに特徴的な単語

海釣り：食べる、多く釣ることを楽しむ

川釣り：自然や景観も一緒に楽しむ

「つり人」が 見つめる 淡水魚の これまでと これから



杉野弘明

山口大学

国際総合科学部

講師

